
フェリックスの初めてのお使い

遠美 見

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェリックスの初めてのお使い

【Nコード】

N67960

【作者名】

遠美 見

【あらすじ】

迷子になったフェリックスのお話です。

(前書き)

お使いに出て迷子になってしまったフェリックス、そこに現れたのは……

こんにちは！！　ぼくはフェリックス・フォン・ロイエンタール。
2歳です。

今日は、朝からおうちにぎやかです。なぜかというと、ファーターの「しんゆう」がおくさんと一緒に遊びに来ているからです。

しんゆう、っていうのは一番仲のいいおともだちのことだってまえにファーターに教えてもらいました。ファーターのしんゆうさんは、はちみつの色の髪でとってもかっこよくてやさしくて、ぼくも大好きです。

しんゆうさんのおくさんはムッターのお料理の先生です。ムッターはおよめさんに来たころはお料理がぜんぜんできなかったけど、たくさん練習して、いまはぼくの大好きなシチューだってじゃがいものオムレツだってなんでも作れるようになりました。ときどき、しっぱいしてとんでもない物ができたりするけどね。

でも今日は二人で作っているから心配なくて、たのしみです。ムッターたちはおしゃべりをしながら楽しそうにお料理をしています。もういるんないにおいがします。

そのときポーン、と時計が11時をしらせた。その日、フェリックスは11時になったら買い物に連れて行ってもらえることになっていて、だいぶ前から時計が鳴るのをまっていたのだった。

とけいが鳴りました！！　ぱんやさんに行く時間です。

ファーターたちと一緒に、おひるに食べるやきたてのパンを買いに行くやくそくです。ぱんやさんはいいにおいがするし、おいしいパンがいっぱいでばくのだいすきなお店です。

「ファーター、はやく行こう」とぼくは呼びにいったんだけど、ファーターたちは3次元チェスの真っ最中でうんうんとおへんじをするけど動いてくれません。

ぼくは「はーやーくー」と少しおこった声で言いました。そしてらファーターがこういったんです。

「フェリックスはもう2歳だろう？ 一人で行けるな？」って!!

そうか!! ぼくはおにいちゃんだから一人でおかいものに行けるんだ。よおし!!

「うんわかった!!」とフェリックスはかけた。

ぱんやさんならいつも行ってるから道はおぼえています。

お金はもう払ってあるから、もらってくるだけです。

フェリックスははりきって飛び出していく。

「フェリックスはどこに行くって言った？」

「トイレだろ・・・一人で行けるくせにたびたび俺をつき合わせるんだ」

「ぶ〜ん・・・」

帝国軍の双壁は目の前で起きている一大事に気づくことなく、チエスに没頭していた。

フェリックスはとことことカワイイ足取りでばんやさんにむかっていた。いつもとおっている道なのに、今日はなんだかちがう道に見える。

いつもはファーターやムッターと手をつないでいるから、見たいものがあってもどんとおりすぎてしまうの。

でも、今日はキレイな石や、ありさんを見ているも「はやくおいで」っていわれません。

「おにいちゃん」になるのって、うれしいです!!

そんな事をしながら歩いているうちにいつの間にか、よく覚えていたはずの風景は消えて、フェリックスは知らない道に迷い込んでしまった。

いったいどこで道を一本まちがえたんだろう？曲がり角を何回反対方向にまがったのだろうか？

とにかく、自分のいるところはどこなのか、小さいフェリックスには全くわからなくなっていた。

「……ムッター」

呼んでも、返事はない。いつもなら呼べばムッターが来て抱っこしてくれるのに今はひとりぼっち。

フェリックスはかなしくなって、なみだが出そうになったけど、
ファーターがいつも

「男なら泣くな」

って言ってるから一生懸命にがまんした。と、そのとき……

ぺろり

ほっぺたに温かいものがふれて、がまんしてもこぼれてきた涙を
ぬぐってくれた。

見ると、それは白黒のぶちの犬だった。びっくりしていると、今
度は鼻の頭を舐められた。

「くしゅぐつたい!!」

フェリックスはかなしいのを忘れて笑い出した。

「どうしたね？君。迷子かね？」

その犬をつれていたおじさんが、その声をかけてきた。フェリッ
クスはちよつとむつとして、

「ばく、まいごじゃありません!! おつかいでしゅ!!」

と、おじさんに言い返した。

おつかいにでて、商店街からいささか離れた路地で、顔を真っ赤にして泣くのをがまんしている子供。

迷子決定だな。

どうしたものかと、オーベルシュタインはため息をついた。

そのころ……

ロイエンタール家は大騒ぎになっていた。エルフリーデとエヴァンゼリンが昼食の支度を終えてキッチンから出てきたとき、ロイエンタールとミッターマイヤーはまだ3次元チェスをしていた。

パンを取りに行く予定の時間はとうにすぎている。

エルフリーデはため息をつき、パン屋に行くのを楽しみにしていたフェリックスをつれて自分で取りに行こうとフェリックスを呼んだのだが、返事がない。

エヴァンゼリンと2人で家中を探してみたが、どこにもいない。

大人たちは青くなった。戦争が終わったとはいえ、まだ混乱は残っているし、地位が上ならそれなりに敵は多い。もし誘拐でもされたらえらい事だ。

「どうしてちゃんと見てくれなかったの!!」

エルフリーデが泣きそうな顔でロイエンタールを責める。

「なにおっ!! そっちこそ下らん話に夢中になっているからだろうが!! だいたいまだに2つのことが同時に出来ないなど、不器用にもほどがある!! それでも母親か!!」

いつもなら巻けづにいい返してくるエルフリーデが、今日はこの言葉で泣き出してしまった。

「言いすぎだぞ!! ロイエンタール」

ミッターマイヤーがたまりかねてロイエンタールを黙らせ、泣いているエルフリーデをエヴァンゼリンが慰めた。

ロイエンタールも、自分の失態に気づいたが、すでに遅かった。

「・・・とにかく、探してくる。どうせそんなに遠くへは行けまい」

「ロイエンタール、俺も行くよ」

2人は手分けしてフェリックスを探しに出た。

当のフェリックスは元気いっぱい犬と遊びながら商店街をめざして歩いていた。オーベルシュタインはフェリックスが「ぱんやさん」に行く事、店の前に大きなクマの置物があることを、仕事です

る尋問の倍以上の時間と労力をかけて聞き出し、そこに向かった。
た。

そこは、幸運にもいつも鶏肉を買いに行く肉屋の近くだったので
覚えていたのだ。

「あ、あった!!」

フェリックスは見慣れたクマの置物を見つけると、嬉しそうに駆
け出した。

パンの袋を抱えて歩く2歳児の姿は、まるで紙袋に足が生えたよ
うにオーベルシュタインには見て取れた。

「おじちゃん、ありがとう」

フェリックスはにっこり笑って言うと、自分と犬にバイバイと手
を振ってえっちらおっちらと歩き出す。

どうやら帰り道はわかるようだが、非常に危なっかしい足取りで、
どうにも見送ることができずに、しかたなくオーベルシュタインは
フェリックスの後について歩いた。

5分ほど歩いたとき、子供は「あ、ファーターだ!!」と嬉しそ
うに駆けだした。やはり、どうみても紙袋が走っているようにしか
見えない。案の定、つまづいて、転びそうになったところを父親が
受け止めて抱き上げる。

「フェリックス！ どこに行ってたんだ？ みんな心配してたんだぞ」

「あのね、おちゆかいしたの」

フェリックスはパンの袋を得意げにロイエンタールに見せた。

「もう、お兄ちゃんだから一人でいったの」

ロイエンタールは、そのとき初めてこの事件の発端が自分の不用意な言葉だったと気がついた。なんといいのかわからなくなって、フェリックスの小さな身体をぎゅっと抱きしめた。

肌を感じる温かさとは別のぬくもりが身体に満ちる。

これを失ったら、生きられないと思うほどの温かくて、切ないぬくもりだった。

「とにかく帰ろう・・・みんな待ってるからな」

「うん！！ あ、おじちゃん、わんわん、バイバイ」

フェリックスは、オーベルシュタインに気づいて手を振る。ロイエンタールは予想もしない人物の登場に驚いた。

「・・・なぜ、卿がここにいる？」

「あのね、ぱんやさんおしえてくれたの。それからわんわんとあそびたいの」

「……それは世話になった……。。。。礼を言う、軍務尚書殿」

「いや、散歩のついでだ。気にせずともよい……」

オーベルシュタインはフェリックスに手を振って（実際は手をわずかに動かすぐらいの動きだったが）元来た方へ歩き出す。

そのとき、いつも表情のない顔が確かに微笑んでいたのをロイエンタールは見た。

一方、オーベルシュタインも同僚の意外な顔を見た。

「あの男もああいう顔をするんだな」

双方がそう感じていた。

フェリックスには大きすぎた紙袋をロイエンタールが持ち、手をつないで道を歩く。

「フーター、ぼく、おつかいできたよ」

「ああ、がんばったな……だが道に迷ったのだろうか？」

「……ありしゃん、みてたから？」

「前を見て歩くと、いつも言っているだろうか？」

「・・・・・・・・・・」

「車にでもぶつかつたら、どうするんだ？」

「・・・・・・・・ごめんなしゃい・・・・・・・・」

「いい子だな、フェリックスは」

「ファーターもムッターに謝らないといけないんだ・・・・・・・・。おまえみたいに素直になれたらいいのにな・・・・・・・・。」

自分にはとても難しいけれど、今日エルフリーデに「ひどいことを言つてすまなかつた」と言えたら、二人の間がまた少し近づくよ
うな気がした。

END E

(後書き)

エルフリーデは実はあまり怒っていません。ロイエンタールが青く
なって探しに行ったのが嬉しいからです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6796o/>

フェリックスの初めてのお使い

2010年11月3日04時52分発行